



罰ゲームで告白し
付き合うことになった巨乳陰キャ女が

調子に乗るので
ゲームでボコした結果。

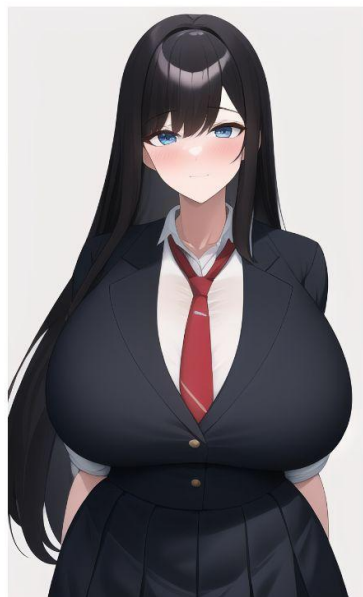
R18



エロバトルン文庫



登場人物



黒瀬ミサキ

身長178

B100W64H98

クラスでは目立たない陰キャ
罰ゲームで主人公から冗談で
告白されるが……

白河アカリ

身長157

B87W56H85

クラスで一番の美少女、陽キャ
主人公が黒瀬ミサキに告白して
いるのを目撃して……



黒瀬マリナ

身長153

B98W62H96

ミサキの妹、姉とは正反対の性格
姉に連れられて来た主人公
とは初対面のはずだが……

1、巨乳陰キャ女とゲーム対決

「前から好きでしたー。付き合ってくださいー」

放課後の校庭。

あきらかに棒読みで言った冗談にしか聞こえない、お約束のセリフだったはずだ。

だが、目の前にいる黒髪で長身の陰キャ女『黒瀬ミサキ』は、顔を真赤にして制服からはみ出すほどの、ムッチリとした身体をうれしそうにふるふると震わせているのだ。

……あ、やばい。これOKされてしまうやつだ。

そう判断した俺が「なーんて冗談、冗談」とかわそうとした矢先に、黒瀬ミサキの後ろにクラス一の美少女『白河アカリ』が現れた。

「え？ええ？遠藤くん黒瀬さんのこと！？」

ち、ちがう！俺はアカリちゃんのことを好きなんだ！

これは仲間内の罰ゲームでちょっとした遊びなんだよ！なんかほらよくある、変なノリになっちゃってさ引くに引けなくなってしまったみたいなの？

だが、そんな事も言えるはずもない。

言えばアカリちゃんから遊びで告白する最低野郎だと思われてしまう！

そしてもし、このまま告白が成立してしまったら……俺は陰キャのデカ女の彼氏になってしまうのだ。進むも地獄、引くも地獄の状況だ！

「ええと……わたし遠藤くんのことよく知らないし……」

おお！黒瀬さんそうだよ。お互いよく知らないっていうか一度も喋ったこともないしね！断ろう断っておくんだ！

「だから、つ……付き合っただけで遠藤くんのこと少しでも分かりたいと思うから……よ、よろしくお願ひします……」

もじもじしながら、よく聞き取れない声で黒瀬ミサキは俺の告白をOKしてしまつたようだ。

「そ、そっか……黒瀬さんも……え、ええ遠藤くん……お、おめでとう！よ、よかつたよね！！」

そして、アカリちゃんが大声で叫んでしまつたおかげで、遠くから見張っていた友達や通りすがりの生徒たちにも聞かれてしまい言い逃れできなくなつてしまう。

「あははは、ありがとう。アカリちゃん……はあ……」

「遠藤くん……か、彼氏になつたんだからさ、一緒に帰ろう……」

「ん？んんん？」

黒瀬ミサキはそう言うと言の腕に組み付いてきた。

うお！そばに寄るなよ！デカ女！俺がチビに見えるだろ！いつもクラスでぼそぼそとしかしゃべらないくせに、なんで急にそんな積極的になるんだよ！

もにゆ♡

お……おっぱい当たつてる。くそ！こいつ身体だけはエロいんだよな。顔は地味で陰キャまるだしのくせに。

「あ……遠藤くん……腕におっぱい当たただけで顔赤くして……かわい……」

「はあ！？」

「ううう……遠藤くんも思春期の男子だしね。しょうがないよ黒瀬さん……だつて……黒瀬さんのおっぱいあたしよりずっと大きいし……」

こ、こいつううううう！寄りにもよってアカリちゃんの前でなんてこと言うんだよ！

アカリちゃんも妙に納得してるし！思春期まるだしのオスだと思われたじゃないか！

「ふふふ……でも、彼氏だから……ちよつとなら触っても……い、いいよ……なんてね♡」

ぶちのめしてええ！

「それじゃあ遠藤くん行こう……さようなら白河さん……」

黒瀬がふたたび俺の腕をがっしりと掴み、おっぱいをむにゅむにゅと押し付けてくる。

力強すぎだろ！俺は黒瀬に引きづられるようにアカリちゃんから遠のいていくのだった。

「うう……バイバイ遠藤くん……黒瀬さん」

くそお！アカリちゃんに誤解されたままだー。遠くで爆笑している友人たちも助けてくれそうにない！最悪だー！

そのままずるずる校門を抜け、繁華街ちかくのコンビニまでやってきた。

「もう……いい加減離してくれよ。」

「あ……ごめん」

この辺になれば下校する生徒もまばらになっていく。

二人きりになったところで俺は切り出すことにした。罰ゲームで告白させられたことを説明してきちんと謝ろう。

なんだかんだ言おうとも俺が悪い。

男らしく謝って……ってあれ？黒瀬がいない？

「ごめ～ん！遠藤く～ん！」

しばらく消えた黒瀬を探していたら、コンビニからジュースのカップを両手に持った黒瀬がドスドスと俺に向かって突進してきた。

「う、うわあああああああ！」

「あ、きゃあああああああ！」

そしてどんくさい黒瀬は何もないところでつまずき、手にしたジュースを二つとも俺にぶっかけて、更にタックルまでかましてくるのだった。

びしょ濡れになった俺の頭に黒瀬の巨乳がぼよおおおん♡とぶつかる。

うっぷ♡

そのまま地面にふたりに倒れ込む俺と黒瀬。

「きゃあああああああ！ごめんなさい！ごめんなさい……わたしたらいつもどんくさくて……乾かさなきゃ……遠藤くんが風邪引いちゃう……」

黒瀬はそう言う俺をひよいとかつぎ上げ、ドスドスと何処かに向かって走りだした。

マジで……なんなんだこいつ……うう……

いろんなショックで頭がくらくらした俺は、かつがれたまま彼女の住むマンションに連れ込まれるのだった。



～黒瀬の家の玄関～

「おねえ、おかえりーって誰！？そのひと！？」

黒瀬の家の玄関先に、ちっこい黒瀬がいた。

ボブヘアで黒瀬ほど髪は長くないが綺麗でつややかな黒髪だ。なんか同じ黒髪だがボサボサしてる黒瀬とはまるでちがった印象のギャルっぽい娘だった。

「この人が遠藤くんだよ！マリナ！わたしたち今日から付き合うことになったんだー♡」

「うえええええ！？ミサキねえがあ！？そ、そうなんだ……」

「あ、こんにちは……」

おそらく妹であろう、ちっこい黒瀬にあいさつをする。でっかい黒瀬にかつがれたまま。

うーむ。身長は低いのだが……黒瀬の妹なだけはあるな。着ているタンクトップもショートパンツもぱっつんぱっつんだ！

タンクトップがおっぱいの重みで伸びていやがる。すさまじい重量感だな。

「……なんか、視線がいやらしいんですけどー」

棒付きのアメをちゅぱちゅぱなめながら、黒瀬の妹が俺を値踏みするように見てくる。

「うっ……そんなことはないですよ？」

「マリナ。わたしたち部屋で遊ぶから邪魔しないでよね。」

「ふーん。いいけど。……そうだ！今日お母さんたち遅くなるってよ……じゃあ遠藤くんミサキねえごゆっくり〜♡」

なぜかニヤニヤしながら、見送る妹『黒瀬マリナ』をあとに俺は姉の黒瀬に引っ張られていくのだった。

～気づいたら黒瀬の部屋～

「きゃ〜遠藤くん〜うま〜〜い♡」

「まかせろ！って……どうしてこうなった……」

気づいたら俺はなぜか、黒瀬と一緒にゲームをしていた。しかも、黒瀬の部屋でふたりきりだ。

さらに言うと、「濡れた服を乾かす間に着ていて」と風呂場で渡された服は黒瀬が普段着ている白いシャツで、俺には当然ぶかぶかだった。

逆だろ普通……でも、甘い香りがするなこの服……

なにもかもがどうでも良くなった。

黒瀬の部屋で俺が一番ハマっているFPSゲームがテーブルの上に置かれているのを見つけふたりで遊ぶことにしたのだ。

黒瀬もそのFPSにハマっているらしく、なんだかんだ盛り上がった。黒瀬は女子でもかなりの腕前で、協力モードではかなり頼りになる。

そのうえゲームを始めるとおどおどしているいつもの黒瀬と違って饒舌になりけっこう楽しかった。

なんだかんだで女子とゲームするなんて初めての体験だけどいいものだな……相手がアカリちゃんならもっと良かったんだけど。

「遠藤くん今度は対戦でやろう♡」

「いいぜ受けて立つ！」

「自信满满だね……でも、Aランクの遠藤くんがSランクのわたしに勝てるかなあ？」

うざい……調子に乗って、今後凸られても困るのでAランクのサブアカウントでやっていたら、ふつうに煽りやがる。

ほんとうは俺、SSランクだっつーの！こいつ結構いい性格してるよな。

このまま調子に乗られても困るから、ちょっとわからせてやるか！

「へーそっちこそ、俺に勝てると思ってんの？じゃあさ一回勝つごとに相手の言う事何でも聞くってのはどうよ？」

「ふふ～ん。いいよ……遠藤くんボコボコにしちゃっても泣かないでよね……」

よーし！乗ってきやがった！目にももの見せてくれるぜ！……と、最初はあっさり負けてやろうかな。あいつが何をお願いしてくるか気にもなるし。

そんな事を考えながら、俺は横目で黒瀬のブラウスからこぼれそうな巨乳を見てしまう。

陰キャな根暗女だけど、間近で見たらそこそこ可愛いし……身体がムチムチしててエロいんだもんな。

い、一応彼氏ってことだし、向こうからなんかエロいお願いされたら～しようがないよな～うん！これも罰ゲームなわけだし！

というわけで、一回戦目はいい感じに調整しながら黒瀬を勝たせてやった。

「やった！やった！わたしの勝ちだね！ね！ね！」

「あーはいはい。お前の勝ちだよ……ほら、なんでもお願い言ってみ？」

「うーんとね、そ、それじゃあ……遠藤くん、わたしのひざの上で次の対戦すること〜」

「はあああああああ！？お前のひざのうえに俺が乗っかるってのかよ！」

「う、うん……そうだよ。ほんとは逆がいいんだけど……わたしデカイから……」

そう言いながらシュンと落ち込む黒瀬。くそ！逆に俺がちいさいって言うようなもんじゃないか！

「わかった！それでやってやるぜ……次見てろよ！」

俺は覚悟を決めて、黒瀬の膝の上に乗る。女の子特有の甘い匂いが全身を包み込むような感じがする。ああ……ふともも柔らかい！

「遠藤くん……大丈夫？」

右耳から黒瀬の声が聞こえたかと思うと、今度は左側から。

「ちょっと……くすぐったい♡」

うおおおおおおお！リアルASMRじゃねーか！そして背中にはしっかりとおっぱい！黒瀬のでっかいおっぱいの感触が！やばい！集中しないと！

うう……俺のちんぽも反応しちまってる！こいつまさかこれを狙って！？

「それじゃあ……二回戦目いくよ？」

「お、おう！今度こそ吠え面かかせてやる……」

結果めっちゃ苦戦した。

「あ♡だめ！ひゃん♡」

耳に吐息がかかり、ビクンと震えてしまう。くそお！

「や～ん♡遠藤くんうまい～♡」

無邪気にそういいながら、黒瀬が巨乳で顔を挟んできやがる！甘い匂いが！じゃなくてあぶねー！

「負けちゃう！わたし遠藤くん負けちゃう！やだあ♡だめええええっ♡♡♡」

両耳から聞こえる黒瀬の喘ぎ声のようなリアルなASMR

「いや♡やああん♡すごいのお♡」

ピンチになるたびに押し付けられる巨乳のやわらかさ、ドスドス音を立てて揺れるふともものハニートラップの数々に大苦戦しながらも、俺は黒瀬になんとか勝ったのだった！

「ひいいん！まけちゃったあ……遠藤くん……すごい……♡」

「ははは、どうだ！参ったか！」

俺は前かがみになりながら、ガッツポーズする。

「そ、それじゃあ……遠藤くんの言う事何でも聞いてあげるね♡何がいい……？」

背中巨乳越しにドキドキしている黒瀬の心臓の音が直に伝わってくる。

あーえーそういえば俺が勝ったときのこと考えてなかった……

俺からエロいお願いしたら、いよいよもどれなくなっちゃうよな。やべえ！どうしよう！

「ねえ……はやく。遠藤くん……」

耳元で甘い吐息がかかる。からかうようにもたれかかるエロい黒瀬の身体に理性は一瞬で敗北した。

「服を脱げ」

「え？」

あ……やべえ。思わず……

「違う！いまのナシ！なしなし！」

「うん……いいよ。何でもするって約束だもんね……」

「いや、だから……！？」

俺をひざからおろした黒瀬がブラウスのボタンを手慣れた手付きで外していく。

眼の前に胸の谷間が現れた。デカイ……白いブラジャーに支えられた巨乳、いや爆乳は実際に見るとめちゃくちゃデカかった。え？何かっぴなのこれ？

「わたし……着やせするから……」

そう言いながら、ちゅうちょなくスカートも取り去る黒瀬。黒いストッキングと体型にアンバランスなほどちいさなパンティが白い彼女の肌に食い込み、むっちりとした肉感を強調させていた。

ムチムチのナイスボディ！こんな身体、海外のエロ動画でしか見たことない！

クソ揉みてえええ！すぐそばにムチムチのエロ肉があったら揉みしだきたくなるのは男として当たり前行為。

だが……俺は耐えた。流されるな！ここで流されたら本当に終わる！黒瀬と付き合うことになってしまう！

陰キャでクラスから浮いているこいつと手をつないで帰り、外では噂になるから家で一緒にFPSで盛り上がり、そのままムチムチエロボディを堪能する毎日になるんだぞ！あれ？そんなに悪くないのでは？

「じゃあ……続きしよ？遠藤くん……」

「ふえ！？続き！？」

「うん……ゲームの続き……それじゃあ座って……」

そういと黒瀬はパンツだけになった太ももをポンポンと叩く。

「へ？」

「遠藤くん。わたしのひざの上で続き……しよ？」

そこも継続すんのかよ！え？だってブラそのまま押し当たっちゃうし、太ももに直に座るの？え？ええ？

「ね……はやく……しよ？」

「あ、ああ……」

もはや壊れていたのだと思う。ふにゅふにゅの黒瀬の太ももに座り、両肩から回される白い腕、背中にあたるブラごしの爆乳。

「やっぱり……恥ずかしい……」

甘くささやく声と少し熱を帯びた吐息が耳にかかる。

「あああん♡だめえええ♡負けちゃうう！また遠藤くんに負けちゃうよお♡」

耳元であえぐ必死な黒瀬のあえぎ、押し付けられる爆乳が俺を体ごと包む。

そして太ももから伝わるぬくもりに……

「終わりだ。黒瀬！！！」

BBBBBBA！！！！

「いやあん♡だめえええ♡だめえええええ♡♡♡いっちゃん！あたし遠藤くん
に逝かされちゃう♡♡♡いやああああああ♡」

黒瀬のキャラがのけぞり地面に倒れた。

「あ！あああ……うぐっ」

俺が最後の引き金を引いた瞬間だった。

ビュクン！ビュッ……じわあああ……

出しちまった……黒瀬の太ももに座ったまま……黒瀬と戦いながら……
射精しちまった……

……こうして最後の戦いがおわった。

俺は興奮した黒瀬に頭をおっぱいではさまれるぱふぱふ状態におちいり、
パンツを精子で汚しながらも、なんとか勝利できたのだった。



2、巨乳陰キャ女にパイズリ射精

「負けちゃった……遠藤くんやっぱり強いね……」

「黒瀬、俺……」

「うん、いいよ。わかってる……」

そう言うと黒瀬はそっとコントローラーを置いた。

「遠藤くんと一度だけ、一緒にこのゲームしてみたかったんだ」

え？

「遠藤くんのことよく知らないって言ったのはウソ。ずっと……ずっと見てたの。」

こいつが俺のことをずっと見てたって？

「学校だけじゃないの。遠藤くんこのゲーム大好きだよ。これサブカアのほうでしょ？いつものアカウントはSSランクだもんね。」

うっ……ばれてた。しかし、なんで！？こいつエスパーか？

「いつも楽しそうに友達とこのゲームの話してるから気になっちゃって……遠藤くんのアカウントの名前も聞きちゃってたから……それで……」

そうか、まあ、いつもあれだけ騒げばなあ……これからは気をつけよう。

「わたしも頑張ってランクあげてたんだ。いつか遠藤くんと遊べたらなって……遠藤くんのプレイを参考にずっと見てたの……」

そっか……協力が難しいゲームだけど、黒瀬なりに頑張ってたんだな……

「ごめんね。気持ち悪いよね……これじゃあ、ストーカーだもん。でも一度だけ一緒にこうしてゲームできたらそれで満足だったの……」

うう、まあ正直、ずっと見られていたかと思うと寒気はするけど……

「今日、遠藤くんにご告白されて嬉しかった！だから舞い上がっちゃって……」

俺は、こいつの気持ちを全然考えなかった……

「ずっと見てきたって言ったよね。だから……遠藤くんが誰を好きなのかも本当は知ってるよ……ごめん……ごめんね。こんなわたしじゃ釣り合わないことも……」

涙を流し始める黒瀬。

「一緒にゲームできて幸せだった。ありがとう……遠藤くん。さよなら……」

前髪でほとんど見えなかった顔を上げた黒瀬。
涙を精一杯ためこんで、わらっていた。

こいつは……

こいつは……勝手に俺にほれて。

勝手にあきらめて、そのうえこんな状態の俺を捨てる気かよ！？

あ——こいつは！マジでイライラする！俺は彼女の手を握った。

「いいから、セックスさせろ」

「へ？」

「お前のせいだぞ！お前がそんなエロい身体してるから！もう無理だ！もう何もかもがどうでもいい！太ももをもじもじさせやがって！そのエロデカいおっぱい顔に押し付けられたときは窒息するかと思ったぞ！そしてダメージ受けるたび、あん♡あん♡耳元で喘ぎやがって！見ろ！」

俺はズボンをパンツと一緒に脱ぎ捨てて射精したあともまだ、完全に勃起したちんぽを黒瀬の顔に押し付ける。

黒瀬は白く汚れた俺のちんぽをマジマジと見つめ、だらしなく口を開けていた。

「お前のせいでこうなったんだ！パンツも汚れちゃった！責任取れよ！」

「ふえ！？遠藤くんのおちんちん射精してるの！？わたしの身体になんて興味なんてないだろうと思ってたのに……」

ぶちっ！俺は振り返ったちんぽを黒瀬の爆乳に挟み込む！

「お前のエロい身体で欲情しない男なんているわけないだろ！ほら！こうしてこのでけえおっぱいでちんぽ挟みたかったんだよ！おら！おら！」

やわらけええええ！すべすべの肌にすべるちんぽ。思った以上に黒瀬のおっぱいは柔らかすぎた！いきなりパイズリしちまったが、もうどうでもいい。

「ほら！おまえが両手で挟み込むんだよ！ゲームに負けたんだから言う事きけよ！」

「は、はい……こ、こうですか？」

俺の理不尽な要求におどおどしながらも、乳輪のおおきなおっぱいを中央に寄せてくる黒瀬。

「ああ、いいぜ！すげえ気持ちいい！くそ！腰が勝手に動いちゃう！」

黒瀬のおっぱいにへこへここと情けなく腰を振ってしまう俺。

「すげえ乳圧！これがおっぱい！黒瀬のおっぱいか！やわらけえ！」

初めてマジマジと見た女子のおっぱいはあまりにデカいうえに、エロかった。

教室では全然目立たない黒瀬のおっぱいがこんなにもいやらしく、可愛かったなんて！

そんなおっぱいに俺のちんぽが何度も何度もねじ込まれているんだ。

気持ち良すぎる！

「さっきから俺の頭の上でぽよんぽよん揺れやがって！クソ！こうしてやる！おら！おら！クソ！ちんぽ挟んでもうれしそうに揺れやがって！」

甘い香りをただよわせて、揺れまくっていた黒瀬の爆乳が俺のちんぽをくわえこんでいる。

腰が止まらねえ！

それもこれも黒瀬がエロいからだ！このブラからはみ出た乳首も！ピンク色でいやらしい！乳首たってるんじゃねえか？たしかめてやる！

「ひっ！いたい！遠藤くんいたいよお！」

黒瀬の乳首を引っ張ってみた。やっぱり立っていやがる！そのままぐりぐり回してやる。

「やあああん！酷いことしないで！」

「へへへそんな事いいながら乳首ガチガチにたってるじゃねーか？感じているんだろ？乱暴におっぱいさわられてよ！」

乳首を中心に驚掴みすると指の間からむにゅむにゅした乳肉がはみでてきた。こいつの乳はパイズリするためにあるようなもんだな！もみ心地も挟み心地も最高だ！

バキバキに勃起したちんぽに吸い付くような黒瀬の乳房。汗ばんできているせいで少しすべるものの、ちんぽに肌が張り付いて離そうとしないのだ。

「おいおい！おまえのおっぱいドスケベだな！ちんぽくわえこんで離さねえぞ！おっぱいまで淫乱なんてやばくないか！？」

「ひう！そんなこと……」

「嘘つけよ！くぷくぷいいながら俺のちんぽ、おっぱいでしゃぶりやがって！
あーマジで気持ちいい！」

ちんぽの出し入れが止まらない。まるでオマンコみたいだ！クソ！黒瀬のく
せに！黒瀬のくせに！

シュコシュコシュコシュコ♡

黒瀬はもうどうしていいかわからず、俺のちんぽが自分のおっぱいに出入り
しているところをはあはあ♡息を荒げながら見つめている。

「ほら！おっぱいもっと押さえて！俺を気持ちよくしてくれよ黒瀬！」

「う、うん……ごめん。ちゃんとするね……遠藤くん」

あわあわと慌てながら自分のおっぱいをズリズリと寄せあげる黒瀬。

うっ絞られる！かと思えばふにゆふにゆと柔らかく包み込まれる感じ。

あーこれこれ！オナニーじゃ味わえない不意に来る連続の快感に俺のちん
ぽは限界を迎えた。

「ああ、気持ちいい～もう限界だ。出すぞ……」

「え？」


【サンプル版】

罰ゲームで告白した陰キャ女が調子に乗るのでゲームでボコした結果。

(おわり)


次ページより

おまけの文章付き挿絵



お……おっぱい当たってる。
くそ！こいつ身体だけはエロいんだよな。
顔は地味で陰キャまるだしのくせに。

「あ……遠藤くん……腕におっぱい
当たっただけで顔赤くしてる……
かわいい……」



眼の前に胸の谷間が現れた。
デカイ……白いブラジャーに支えられた巨乳、
いや爆乳は実際に見るとめっちゃうくちゃデカかった。
え？何カップなのこれ？

「わたし……着やせするから……」

「きゃあああ！熱い！遠藤くんの熱いよお！」
地味顔が白い精子でべっとりと汚れ、
泣いている黒瀬をよけいに見じめにしてみました。



読者のみなさん、こんばんは～
小説家のエロバト＝ルンです。



わたしの名前みたいに
【エッチでバトル】するお話を書いています。

作品のジャンルは
「凌辱」「復讐もの」「ざまあ」「敵女」
または、「男性受け」「おねショ●」「ふたなり」
などです。

わたしの作品を
最後まで読んでいただき
ありがとうございます！

よろしければ、フォローや
高評価、お気に入り登録、
感想レビューを
いただけると嬉しいです！

twitterで情報更新中です。
こちらもぜひフォローを
お願いします。



🔍 エロバトルン 検索

*ご注意CGのみAI生成を
使用しています。

